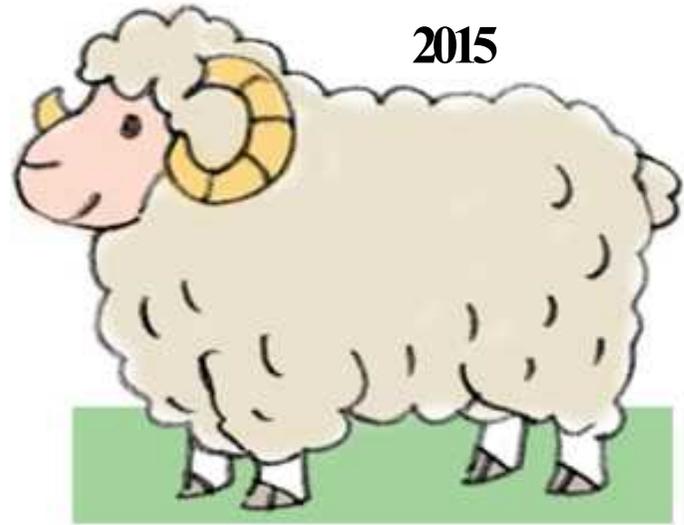


インターネット俳誌／SEIGETU

清月

9 中の出句 16 名 延べ 690 句

2015



第 182 号 平成 27 年 9 月

心に残る俳句

五月雨や松ばかりなる嵐山

梶 一星子

ゆたか

掲句は、大阪府警在職中の余暇に詠まれたもので「ホトトギス新歳時記」虚子編の増訂版に
掲載されています。

一星子さんは、経験豊富な仕事の先輩で、出会いは、私が警察本部の部署に転勤になった時
で、公私にわたり指導を受けていました。

季節を問わず嵐山を通る時や、時に繰る歳時記虚子編を手にした時にこの句を思い出し、精
力的に仕事に取り組んでおられた先輩の姿を思い出します。

また、仕事の余暇に月刊職員機関誌の文芸欄の俳句投句欄に連載される私の句について句評
をいただくなど、俳句についても勉強をさせていただきました。

今でも、先輩が雑談のうちに話された次の言葉が心に残っています。

仕事面では、自然が作り出したものである指紋は、過去・現在・未来の人類において二つと
して同じものが現れない。

似ている指紋でも精査をすると異なる点が見つかる。

作句面では、自然が生み出す景は二度と同じ景は現れない。

職場の窓から見える生駒山系や大阪城も季節・天候・刻々変わる日射しや月の様子などにより、日々何処かが異なって見える。

発表した句であっても、季節や天候を変え、或いは時刻を変えて句材と対峙すると人工営造物であっても背景や周辺の変化により心に響くものが異なることがある。

このような時、最も心に響いた時の状態の景に推敲すると、より句が良くなる。

捜査活動にある現場百回という言葉のように、作句においても疑問が残るときは、納得がいくまで句材と対峙することだ、などと話されていたことが懐かしく思い出されます。

目次

近詠	ゆたか	1
雑詠選	ゆたか	2
寸感	ゆたか	7
互選集計結果報告	高点句	8
	高点者	9
互選一〇句の披講	幹夫	9
	宏一	9
	しゅじ	
	睦夫	
	よし子	
	美琴	10
	恵山	
	省司	
	公平	
	順一	11

近詠

野田ゆたか

恙なく沖に入る日や厄日過ぐ

喜寿といふいざよふ月に似たる日々

地蔵坊寝まり露けき灯を零す

収穫を前に仇なし暴れ川

夜業の灯額に篆刻孜々と彫る

雑詠

(太字は秀句)

ゆたか選

島々の秋を繋げて連絡船 千葉 清水恵山

トンネルを抜けて他郷や蕎麦の花 同

エンジンの音高らかに甘蔗刈る 同

賑やかに秋の浜辺の地引網 同

震災忌人の絶えざる慰霊堂 同

納沙布や岬の牧場に馬肥ゆる 千葉 田村公平

野球子の足元暗き秋の暮 同

獣道奥へ奥へとゑのこ草 同

とどわらのこの世の果てかすさまじき 同

オホーツク臨む放牧天高し 同

燃えながら沈む夕陽や赤蜻蛉 岡山 橋本幹夫
 此処からは背筋伸ばして秋遍路 同
 家それぞれ人それぞれに秋灯 同
 諳んじる般若心経秋彼岸 同
 幾度も戦火逃れし古都の秋 同
 校庭の小さき田んぼ稲穂垂る 吹田 池下よし子
 手熨斗して叩くジーンパン秋日和 同
 たちまちに孤島となりし秋出水 同子
 新月や心に秘めし願ひ事 同
 いつしかに夜更けし雨に秋の声 同
 鳶の輪の螺旋描きて秋の空 岐阜 石崎そうびん
 秋うらら舳揃へて舫ひ舟 同
 秋冷や待合室の椅子固し 同

チエロソナタ腹に響きて夜半の秋 岐阜 石崎そうびん
 片減りの父の砥石や朝寒し 同
 穏やかに晴れる一日や敬老日 鳥取 瀬尾睦夫
 丁寧に出汁引く妻や秋彼岸 同
 きちかうや無口となりし美術館 同
 ぐい呑みに残る余韻や月今宵 同
 かまつかを濡らしてゆける日照雨かな 同
 穴惑 廃 鉞 の山ふところ 静岡 渡邊春生
 障子貼ることにもなれて侘住居 同
 衣被大きな手より渡さるる 同
 うろこ雲反戦の声地に満ちて 同
 柚人の斧打つ音や初紅葉 同
 新米を炊いて古里近くなり 大阪 木村宏一

一鉢の山椒に遊び秋の蝶 大阪 木村宏一
 朝霧の流れゆく峰神々し 同
 手渡しの似顔絵ありし敬老日 同
 無残なる湖なりし秋出水 同
 触れずとも気配で爆ぜる鳳仙花 千葉 筒井省司
 秋の夜や酒酌み交はす友のゐて 同
 秋晴や豊穰祝ふ笛太鼓 同
 金木犀主無き庭で香りけり 同
 一陣の風にコスモス波立ちぬ 三重 後藤允孝
 自分史の道なほ遠き秋灯下 同
 遊ぶ子の影長くして秋の暮 同
 三日月の沈まぬままに願いごと 同
 紅葉のいの一歩にゆすらの木 愛知 石川順一

初鴨や田圃の水がさやぎ出す 愛知 石川順一
 鶏頭や排気ガスにもめげず咲く 同
 大根蒔く野外学習神妙に 三重 山口美琴
 特売と客呼ぶ声や初秋刀魚 同
 東北の復興祈る震災忌 同
 通り雨やみて稲の香新たなり 大阪 森戸しゅじ
 訪ねしは柿の熟れたる鄙の家 愛知 駒田暉風
 登り来てほつと一息風は秋 神奈川 梅津弘子

島々の秋を繋げて連絡船 恵山

紅葉や日射しなど秋気に包まれた島々を巡り
目的の島へ至る通船客が目にした景。

島々の異なる秋の景色を楽しんでいる作者の
様子が詩情豊かに伝わってきます。

繋げての言葉の発見が佳句に繋がった。

納沙布や岬の牧場に馬肥ゆる 公平

一時軍事空港に転用されたことがある、明治
時代に作られた広大な牛馬の牧場の馬の景。

やがて来る冬に備えて皮下脂肪を蓄え冬毛が
伸びつつある群れ馬の様子が覗えます。

納沙布の固有名詞がよく効いている。

燃えながら沈む夕陽や赤蜻蛉 幹夫

秋は赤蜻蛉の産卵期で群れ飛ぶ。真っ赤に見
える晴天の日の落日の野原の大景。

夕日と赤蜻蛉の取合せから秋の日暮れの様子
が詩情として胸中に広がってきます。

夕の時の流れが見事に表現されている。

校庭の小さき田んぼ稲穂垂る よし子

学童が植えた学習田も時が来て稔り、授業と
しての稲刈りが待たれるという時期の景。

学童が立てた案山子が体育授業の児童や運動
会を見ている景を連想しました。

銜いのない確な写生が功を奏している。

鳶の輪の螺旋描きて秋の空 そうびん

鳶は猛禽で餌を探すために輪を描くように上
昇気流に乗り舞い上がっているという景。

台風の去った後などの爽やかに晴れ上がった
秋空の空気感まで伝わってきました。

写生に詩情を拈げるのは作者の実力。

穏やかに晴れる一日や敬老日 睦夫

うからやから或いは地域から祝われる長寿。
その日が晴れて良かったと思う作者の心境。

恙なく今年も敬老日を迎えることができたこと
を喜びとされている作者が覗えます。

「穏やかに」が句の俳趣を深めている。

互選一〇句の集計結果互選者一〇人

高点句

五点 此処からは背筋伸ばして秋遍路 橋本幹夫

五点 鳶の輪の螺旋描きて秋の空 石崎そうびん

四点 燃えながら沈む夕日や赤蜻蛉 橋本幹夫

四点 トンネルを抜けて他郷や蕎麦の花 清水恵山

四点 島々の秋を繋げて連絡船 同

四点 自分史の道なほ遠き秋灯下 後藤允孝

四点 新米を炊いて古里近くなり 木村宏一

四点 登り来てほつと一息風は秋 梅津弘子

高点者

十五点 清水恵山
十四点 橋本幹夫
十点 田村公平
十点 池下よし子

互選一〇句

橋本幹夫選

定年の無き妻秋刀魚二匹焼く 筒井省司
一木は蝸の木となりゆけり 瀬尾睦夫
こぼれ萩雨に乱れし石畳 池下よし子
暮れなづむ宮の渡しの女郎花 後藤允孝
花嫁の白無垢染める曼珠沙華 山口美琴
少年の産毛は薄し竹の春 清水恵山
朝霧の流れて峰の神々し 木村宏一
鳶の輪の螺旋描きて秋の空 石崎そうびん
秋の海遠くに白く消えてゆく 石川順一
一列に人影伸びて花野行く 田村公平
互選一〇句 木村宏一選
鳶の輪の螺旋描きて秋の空 石崎そうびん
燃えながら沈む夕陽や赤蜻蛉 橋本幹夫
登り来てほつと一息風は秋 梅津弘子
走りゆく風の足あと稲穂波 池下よし子
花嫁の白無垢染める曼珠沙華 山口美琴
少年の産毛は薄し竹の春 清水恵山
秋晴や豊穰祝う笛太鼓 筒井省司
一列に人影伸びて花野行く 田村公平
障子貼り終へて夕日の美しき 渡邊春生
網傘の白きうなじや風の盆 後藤允孝

互選一〇句

森戸しゅじ選

家それぞれ人それぞれに秋灯 橋本幹夫
燃えながら沈む夕陽や赤蜻蛉 橋本幹夫
此処からは背筋伸ばして秋遍路 橋本幹夫
島々の秋を繋げて連絡船 清水恵山
トンネルを抜けて他郷や蕎麦の花 清水恵山
新米を炊いて古里近くなり 木村宏一
登り来てほつと一息風は秋 梅津弘子
手熨斗して叩くジーンパン秋日和 池下よし子
障子貼ることもなれて侘住居 渡邊春生
自分史の道なほ遠き秋灯下 後藤允孝
互選一〇句 瀬尾睦夫選
新米を炊いて古里近くなり 木村宏一
鳶の輪の螺旋描きて秋の空 石崎そうびん
此処からは背筋伸ばして秋遍路 橋本幹夫
登り来てほつと一息風は秋 梅津弘子
トンネルを抜けて他郷や蕎麦の花 清水恵山
障子貼ることもなれて侘住居 渡邊春生
自分史の道なほ遠き秋灯下 後藤允孝
野球子の足元暗き秋の暮 田村公平
通り雨やみて稲の香新たななり 森戸しゅじ

選 九句

互選一〇句

池下よし子選

新米を炊いて古里近くなり 木村宏一
鳶の輪の螺旋描きて秋の空 石崎そうびん
燃えながら沈む夕日や赤蜻蛉 橋本幹夫
登り来てほつと一息風は秋 梅津弘子
花嫁の白無垢染める曼珠沙華 山口美琴
島々の秋を繋げて連絡船 清水恵山
納沙布や岬の牧場に馬肥ゆる 田村公平
穴惑磨鉢の山ふところに 渡邊春生
一陣の風にコスモス波立ちぬ 後藤允孝
穏やかに晴れる一日や敬老日 瀬尾睦夫
互選一〇句 山口美琴選
新米を炊いて古里近くなり 木村宏一
朝霧の流れゆく峰神々し 木村宏一
島々の秋を繋げて連絡船 清水恵山
トンネルを抜けて他郷や蕎麦の花 清水恵山
鳶の輪の螺旋描きて秋の空 石崎そうびん
燃えながら沈む夕陽や赤蜻蛉 橋本幹夫
こぼれ萩雨に乱れし石畳 池下よし子
野球子の足元暗き秋の暮 田村公平
障子貼り終へて夕日の美しき 渡邊春生
自分史の道なほ遠き秋灯下 後藤允孝

互選一〇句

清水恵山選

戻り来て迷ふほどなる稲の丈 森戸しゆじ
一鉢の山椒に遊び秋の蝶 木村宏一
漂泊は男のゆめよ秋つばめ 石崎そうびん
此処からは背筋伸ばして秋遍路 橋本幹夫
金木犀姿見えねど確かなり 池下よし子
東北の復興祈る震災忌 山口美琴
触れずとも気配で爆ぜる鳳仙花 筒井省司
解決に時間使へと草の花 田村公平
障子貼ることにもなれて侘住居 渡邊春生
一陣の風にコスモス波立ちぬ 後藤允孝

互選一〇句

筒井省司選

エンジンの音高らかに甘蔗刈る 清水恵山
鶏頭や排気ガスにもめげず咲く 石川順一
自分史の道なほ遠き秋灯火 後藤充孝
秋冷や待合室の椅子固し 石崎そうびん
此処からは背筋伸ばして秋遍路 橋本幹夫
獣道奥へ奥へと急のこ草 田村公平
朝霧の流れて峰の神々し 木村宏一
名月や雲しらすらと流れゆく 池下よし子
名月や急ぐことなし帰り道 清水恵山
名月や心遊ばす空の果て 瀬尾睦夫

互選一〇句

田村公平選

アルプスの水音絶えず花真菰 清水恵山
トンネルを抜けて他郷や蕎麦の花 清水恵山
島々の秋を繋げて連絡船 清水恵山
両翼に花野を抱き落暉かな 清水恵山
露玉の煌き落ちる芋を掘る 清水恵山
一コマを写真に納め秋澄めり 瀬尾睦夫
綿シヤツのさらりと乾き秋涼し 瀬尾睦夫
往生の道は選べず蚯蚓鳴く 池下よし子
特売と客呼ぶ声や初秋刀魚 山口美琴
絵手紙にあの日の柿が熟れました 駒田暉風

互選一〇句

石川順一選

秋高し甜菜畑の地平線 田村公平
知床や野積みの漁具に草の花 田村公平
母馬が仔馬を舐めて馬肥ゆる 田村公平
遠き日のつまらぬ戦さ竹の花 橋本幹夫
此処からは背筋伸ばして秋遍路 橋本幹夫
竹を伐り立て架け置けば風に鳴る 清水恵山
毬栗や学ぶ心は野にありて 木村宏一
秋暑し眼底を射るアスファルト そうびん
木登りの子らてつぺんの鱗雲 池下よし子
山人の斧打つ音や初紅葉／春生

インターネット俳句 清月
第182号
平成27年9月中の出句から

発行
平成27年10月20日

主宰 兼 編集
野田ゆたか

発行所
枚方市 大阪清月庵

清月俳句会のホームページ
<https://haiku575.info/seigetukai/home/homu.htm>